地域研究　№26
2021年４月　29-38頁

The Institute of Regional Studies, Okinawa University
Regional Studies №26　April 2021 pp.29-38

７世紀『隋書』流求国伝・沖縄島説

壱　岐　一　郎*

“Suisyu” Ryucyuguo is Okinawa Island

Iki Ichiro

要　旨

７世紀の『隋書』東夷伝は流求国・倭国（倭国）を記録したが、この流求国については内外で台湾とする説が有力とされてきた。しかし、東夷伝と流求国に侵攻した隋軍の将・陳稜伝を仔細に検討すると、当時の流求政治社会は複数構造をもち、文明化の道を歩んでいたといえる。さらにその舞踊・音楽は現琉舞と音楽に通底する完成度の高い文化を示していた。本稿は訪台４回、先島・与那国島から奄美諸島を調べ、沖縄に７年居住した者の報告である。

キーワード：中国側見聞録　広域把握　琉球７世紀文化　行商力　琉舞音楽

1998年、本紀要10号に「中国正史〈夷洲〉〈流求〉広域説」を寄稿し、那覇市に７年住み、先島・台湾島ほか大陸各地を調べた。以後、古代日本史について、日本側史料と中国史料との大差を比較し、紀要18号に掲載され、『中国論説資料』８号に載録された。さらに、近年、『中華文明史』（北京大学編・原文４冊・約2,000頁）および邦訳『中国の文明』８冊・4,000頁）を読了、紀要22号に紹介文を寄稿した。古代日本および琉球社会が中華文明の支流から、自立への道を歩んだと捉えたものである。

さて、『隋書』通称の「流求国伝」は内外に於いて台湾説が有力であるが、仔細に検討すると沖縄島こそ優れた古代社会を形成していたことを証明するものと考察した。本稿は、古代琉球社会が早期に自立し、対外交流を模索していたことを明示するものである。

１　私にとっての沖縄～80年

祖父・寅之進が13代那覇地裁所長を務めたこともあり、大戦中に東京で安里屋ユンタを覚

* 日本記者クラブ会員　天津社会科学院東北亞研究所

えた記憶がある。小学５年ごろのことだ。戦後、福岡市に住み、民放労組の九州代表として、祖国復帰運動に熱くなった。瑞泉を入手するのにひと月かかった時代だ。復帰要求行進では山口・福岡両県下を延べ３キロを歩いている。1960年代には数少ない琉球料理屋に通い、琉舞の公演を覗き、火野葦平や木下順二の著書に魅了された。1963年、フジ系のドラマ『マブニの石』（毛利恒之脚本）を演出、沖縄ロケが不可能のため、博多湾の浜辺を沖縄に見立てて録画した。祖国復帰運動の青年の愛と苦悩を描くもので鹿児島空港ではロケをした。この時、偶然会った喜屋武真栄さんと名刺交換している。このドラマは沖縄テレビでしばらく遅れて放送された。東京では晴天の夜、プロ野球巨人・阪神戦の中継があり、ドラマは大差の視聴率で以後、私はドラマ監督失業の憂き目に遭い、紆余曲折あり、ドキュメンタリーやトーク番組と、日中古代交流史の独学に転じた。1984年、『中国正史の古代日本記録』（葦書房）に流求国全訳を掲載している。1986年、早期退職し、東京で専門学校講師を３年務め、小型船舶１級免許を取り、仙台時代の親友（台湾出身）の勧めで北京放送日本語部に就職した。あの大事件の春で、佐賀で「日中友好・徐福シンポジウム」が開かれた年だ。このシンポのテープを入手、30分で紹介した。当時、北京の国際ラジオは短波で地球上くまなく届けていた（現ＣＲＩ中国国際放送・サイトで日本語紹介）。帰国後数年、東海大学福岡短大で働いたが、65歳、単身で沖縄生活をと考えた。その30年前に管理職就任を辞退して復帰運動に関わった沖縄にまだ大規模な米軍基地群がある、この事実と対座しようとしたのだ。若干の預金はあったが、沖縄の知人は福岡ユネスコの会で挨拶した沖縄大学の新崎盛暉教授だけだった。しかし、那覇市に住んでみると、1950年代の仙台でその名を知った平敷青年（当時。医学生・沖縄国際大学教授）や民放労組の祖国復帰運動で協同した知人が社会的貢献をしていることに感銘を受けた。沖縄在住７年、フェリーで先島・与那国島へ旅し、訪台４回（原住民博２回）ほか中国へと足を進めた。４度目の西安（長安）から2,000キロの彼方、沖縄・台湾と福岡はＶサインの間に収まることに気づいた。古代（中国では中世）の中国正史は広域に捉えていると証明できると同時に、改めて琉球国の自立文明を知るのだった。中国では郭沫若氏の歴史地図が台湾を夷洲としていて影響力があり、流求は台湾を含めてもいいが、７世紀の記録は正しく沖縄島だとの確信を強めた、私の古希前後だった。

２　『隋書』東夷伝・「流求国」全訳　列伝『陳稜伝』関連部分訳

壱岐一郎　2020年４月

巻八十一東夷伝・流求国　唐　魏徵ほか　636年編修

全訳　参考　1973年　松本雅明訳

1984年　壱岐一郎訳　一部改訂

（東夷、各国　新羅、略）

流求国[1]は海島の中にあり、福建省建安郡[2]の東に当たり、水行五日で着く。土地には山の洞穴が多い。王の姓は歓斯[3]、氏名は渇刺兜[4]だがその由来は分からず、国は代々続い

ている。土人は王を呼んで可老羊[5)]、妻を多抜荼[6)]という。居所を波羅檀洞[7)]といい、塹柵を三重にし、流水を用い、棘の樹を藩としている。王の居る所の舎屋の大きさは十六間あり、禽獣が彫刻してある。闘鏤樹（榕樹）が多く、橘に似て葉が生茂り枝葉が髪のように下に垂れ下がっている。国に四、五人の帥[8)]がいて諸洞[9)]を統率する。洞には小王がいる。方々に村があり、村には鳥了帥[10)]がいて、共によく戦う者がなり、たがいに自ら立って一村を治める。

男女は皆白紵で髪をくくり、髪を項の後ろから巻いて額に下げる。男子は鳥の羽を冠とし、珠貝で装い、赤毛で飾るが形や作りは同じではない。婦人はうすぎぬで模様をつけた白布を帽としているがその形は正方形である。闘鏤の皮やいろいろな色の紵や雑毛を織って衣服を作るが、裁ち方は同じではない。毛を織って螺貝を垂らし飾りにし、いろいろの色を間に入れ、小貝を吊り下げる。その音色は珮玉[11)]のようである。鐺をつなぎ、釧とし、珠を頸にかけ螺、藤を織って笠とし、羽毛で飾る。

刀・稍・弓箭・剣・鈹（大針）の類があるが、この地に鉄は少ない。刀は皆薄く小さく、多くは骨角でこれを補っている。紵を編んで甲を作るが、或いは熊・豹の皮を用いる。

王は木製の獣に乗り、左右を輿としてかつがせて行く。導従する者は数十人を出ることはない。小王は机に乗るが、それには獣形が彫ってある。

国人は攻め合うことを好む。人は皆驍健でよく走る。死を恐れず、創（きず）に耐える。諸洞は各々部隊をつくり、たがいに助け合わない。両軍があい当たる時、勇者三、四人が出ておどり上がって騒ぎ、言葉を交わし罵り、撃ち合う。このようにして勝てなかったならば一軍は皆逃げ去り、人を遣わし謝って双方和解する。戦死者を収容し、共に集まって食べる。そこで髑髏を持って王の所へ行き、王は冠を賜って隊帥とさせる。

賦斂（課税）はなく、事があれば均等に税をとる。刑を用いるのに定まった基準がなく、事に臨んで科を決める。犯罪はすべて鳥了帥の所で断じ、服さないときは王に上請する。王は臣下に共に議定させる。

獄に枷、鎖はなく、ただ縄でしばる。死刑を決めると鉄錐で行う。大きさは筋（箸）のようで長さ一尺頭の頂を鑽って殺す。軽罪には杖を用いる。

風俗に文字はなく、月の満ち欠けを望み見て時節を紀し、草の枯れたり青くなるのを見て年歳とする。

人は深目、長鼻ですこぶる西方の胡人に似ている。また、小慧[12)]がある。君臣上下の節や拝伏の礼はない。父子は同床で寝る。男子は髭鬢を抜き、身体で毛のある所はすべて除去する。婦人は墨で手に入れ墨をし、虫や蛇の文様を入れる。嫁に出したり、娶るときには酒肴、珠貝をもって正しい礼（聘）とする。あるいは男女があい悦べばそこで匹偶（結婚）する。婦人がお産をし乳を与えるときには必ず子衣（えな）を食べる。産後は自分が灸をし、汗を出し、五日で平常に復する。木槽に海水を晒して塩をつくり、木汁から酢をつくる。米麹を醸して酒をつくるが味はたいへん薄い。食べるのに手を使う。たまに異 味のものを得ると

先ず尊敬している人に勧める。およそ宴会のあるとき、酒を執る者は必ず名前を呼ばれるのを待って、その後に飲む。王に酒を上る者もまた王の名を呼び、銜杯して共に飲むというのもまったく突厥[13]に似ている。歌い出し、足踏みして一人が歌えば皆が和し、音はきわめて哀怨にひびく[14]。女子は上膊を上げて手をひるがえして舞う[15]。死者が将に息を絶とうとするとき、抱えて庭に出て親戚や客は哭泣してあい弔う。遺体を洗い、布帛で包み、葦草を敷き、土に埋めて殯りする。上に墳（盛り土）をしない。子は父のために数か月間、肉を食べない。同じ流求でも南境の風俗は少し異なり、人が死ぬと邑里の人が共にこれを食べる。

熊・羆・豹（やまいぬ）・狼がいる。猪と雉がもっとも多い。牛・羊・驢馬はいない。田はよく沃えている。先ず火で焼いたあと水を引いて田に灌ぐ。一本の插（すき）を持つ。石で刃をつくり、長さ一尺余、幅数寸のもので耕す。土は稲・粱・黍胡・麻・豆・赤豆・胡豆・黒豆などによろしい。木には楓・桔・樟・松・梗・楠・杉・梓・竹・籐があり、実のなる木は江表[16]と同じであり、気候風土は嶺南[17]に似ている。風俗は山海の神に事え、祭るのに酒肴をもってし、戦闘して人を殺すと、殺した人を神に祭る。あるいは茂った木に小屋をかけ、あるいは髑髏を樹上に置き、箭で射る。あるいは石を累ねて幡を繋け神主とする。王の居るところの壁下には髑髏を多く集めて佳しとする。人は門戸の上を空けて、必ず獣頭骨角を安置している。大業元年(605年)[18]、海師[19]の何蛮らは春秋二季ごとに天清く風静かなとき、東を望んだ。ぼんやりとして煙霧の気のあるのに似ていたが、幾千里あるかわからなかった。その三年（607年）、煬帝[20]は羽騎尉[21]・朱寛に海に浮かんで異俗を訪ねさせたが、何蛮がこのことを告げたので何蛮と共に行かせ、流求国に着いた。言葉が通じなかったので一人を捉えて帰った。明年（608年）、煬帝は再び朱寛に流求国を慰撫させようとしたが流求国は従わなかった。朱寛はその布や甲を取って帰った。時に倭国使[22]が来朝していて、これを見て言った。これは夷邪久国人[23]の使っているものだと。煬帝は武賁郎将[24]・陳稜と朝請大夫・張鎮州を遣わし、兵を率いて義安[25]より海に浮かんで流求を攻めさせた。高華嶼[27]に至り、また東行して二日、龜鼈嶼[28]に至り、さらに一日で流求に着いた。初め、陳稜は南方諸国人を率いていて、その中の崑崙人[29]が流求の言語をよく解したので、遣わして慰撫したが従わず、拒み逆らった。陳稜は攻撃し、その都に進み、しばしば戦い、ことごとく破ってその宮室[30]を焼き尽くし、男女数千人を虜にし、戦利品として持ち帰った。これより往来は絶えた[31]。

（次に倭国〈倭国〉掲載　倭はよわい―夷蛮が日出る国と自称したので蔑称したのか）

巻六十四　列伝　第二十九　陳稜

『隋書』列伝二十九陳稜伝

（2018年２月試訳）

（前文　約200字、略）

煬帝は即位すると（陳稜に）驃騎将軍を授けた。三年（607年）武賁郎将を拝受した。三

年して朝請太夫張鎮周と兵万余を出して義安から流求国を撃つべく海に出て、一月余で行きついた。流求人は艦船を初めて見て商旅[32]に出て軍との取引きに参じた。陳稜は兵らを率いて上陸し、鎮周を先鋒として遣わした。その王・歓斯渇刺兜は兵を遣わし戦闘に抵抗したが鎮周は大いに撃破した。稜は檀洞に進み、その小王歓斯老摸[33]も兵を率いて戦闘を拒んだのでこれを破り、老摸を斬った。その日は霧雨が降り、暗闇が覆い、将兵が懼れ慄いたので、稜は手本として海神を祭った。霧が晴れたので五軍に分けてその都へと急いで走らせた。渇刺兜は兵数千を率いて降伏を拒んだので稜は鎮周を先鋒として行かせた。稜は勝ちに乗じて北へ進み[34]、その砦に達し、渇刺兜の背後に陣取った。稜は鋭くこれを撃ち、朝から半日も苦闘した[35]が休まなかった。渇刺兜の軍が疲れて砦の中に後退したので、稜は堀を埋めてその砦を攻め落とし渇刺兜を斬り、子の島槌を捕らえ、男女数千人[36]を捕虜にして帰った。煬帝は稜を右光禄太夫に武墳は元のままとし鎮周を金紫光禄太夫に進めた。
（後略　陳稜の内外転戦）。

3　解説

1980年代初め、福岡で流求国を訳した時には不明だったが、その後、中国・日本で流求国・台湾島説が有力で定説化していることに大きな疑問を持った。1997年から2003年まで沖縄に住んで小型船舶１級免許の更新などしている間に、「陳稜伝」に注目した。

華北・華中の政権は周辺諸民族に強い関心を示し、『後漢書』の時代から「倭国の極南界」と記録し、３世紀の呉王孫権は２将軍と万の水軍を東方探査に派遣している。この目標の夷洲を台湾とするのが内外の定説だが、私は帝王を名乗った孫権が江南対岸僅か170キロの島に大志を抱いて攻略に出るものかと考えた。陳舜臣氏による対魏作戦のための「人狩り」説が成立するとした。

さて、煬帝は結果的に北は高句麗、南は流求国を攻め、高句麗戦で惨敗、落日へ向かう、南の敵は夷州・台湾島ではありえない。この点、権威ある中国の歴史地図は尊敬する郭沫若氏の監修主編だが異議を申し立てたい。その理由はこうだ。

１つに、大軍が押し寄せた場合、台湾島の住民ならば山間部へ逃げて抵抗せず、隋軍は灼熱の島で深追いしないだろう。

２つに、住民が「商旅」に来ていたという記述は重要だ。行商という商売は重要な営みで人の集団を決定づける。中国で「夏・殷・周」を「夏商周」と称している理由からも流求人の「商旅」に敏感なはずだ。台湾の先住民に異民族に対して行商に出る習性があったとは考え難い。後世、琉球国人は東南アジアでレキオと呼ばれて親しまれる国際人になっており、15世紀の「万国津梁の鐘」（京都・相国寺鋳造）銘文はそのシンボルで堂々たる国際メッセージだ。

３つに、隋軍の侵攻の相手が琉球の先島でなくて沖縄島（通称・沖縄本島）である理由は戦闘がかなり長いという記録からだ。７世紀初め、流求国では王以下、上下の堂々たる行政組織（王―帥―洞・小王―鳥了帥）を作っている。『隋書』は住民がよく闘い、よく走った

と書いた。先島なら戦闘は半日・長くて１日だし、数千人の捕虜からも住民は数万の沖縄島と見てよかろう。なお、先島か台湾島へも侵攻したとみられる記述がある（「同じ流求でも南境の風俗」か）。

沖縄に住んだ私は参院議員萱野茂氏（松本英一議員死去・繰り上げ当選・2006年没）ほかアイヌの人とも私語を交わす機会があり、19世紀ごろまでの北海道アイヌは約４万とされ、この地の場合は千年の間に大きく増えなかったといわれている。同時に、琉球の場合は約数万と見た。南の島は海陸の食料に恵まれていたとはいえ干ばつや台風、地震などの災害を考えての想定だ。

４つに、戦闘して人を殺した場合、その相手を祭るという風習だ。敵味方なく祭るという信仰風俗に感銘を受ける。20世紀末の「平和の礎」（いしじ＝沖縄・糸満南）に通じる誇り高い人間愛といえるのではなかろうか。

以上、流求は長い間に孤島だったが、散発的に中国や九州島の文明を吸収することができた。鑑真一行の遭難に琉球の名が見え、空海（774～835）入唐の文に「留九」の記述がある。部分的に外部の文明を受容しながら琉球内部の精神文明が培養されてきたのだ。「鉄器」については1997年、奄美で出土した小指の先ほどの鉄塊数個を鑑賞する機会があった（８世紀伝来説）。このような経験から『隋書』流求国記録は元テレビ・ジャーナリストの私には優れた記録文学として浮かび上がる。

＊

なお、若干の問題点を指摘するとすれば、動物の記述で、「同じ流求でも南境の風俗」の後の「熊・羆」の存在がある。このあたりは台湾島高地の熊？の見聞が混在したか、とも考えた。しかし1999年、名護市の資料館で黒豚のはく製を見て仰天した。体長２メートルもの大豚だったのだ。もし品種改良が少なく、この黒豚が山野を疾走していたらと想像した。台北の原住民博物館でも熊の存在を見た記憶がない。一方、隋の軍民が大陸で熊・羆をしばしば見ていたとも思われない。見聞の「誤差」の範囲といっていいのではなかろうか。

４　先学に学んでの結論

近現代150年、夥しい研究。議論が交わされ、そこには懐かしい学究の名が見られる。さらに、列島では法政大学を嚆矢として、沖縄研究所が設置され、市民を加えた研究が大きく前進している。歴代研究者では伊波普猷を筆頭に、オランダのグスタフ・シュレーゲルの名も見られる。ライデン大学の初代東方研究所長だ。列島では白鳥庫吉・喜田貞吉ら諸氏も積極的だった。大戦後の研究では1970年代の松本雅明・大林太良の名を見る。総じて、論者のまとめとしては国分直一の言が興味を呼ぶ。「流求国は台湾を知る者には台湾に思え、沖縄を知る者には沖縄に思える」と記した（参考文献）。

さて、1997年以降、沖縄に学んだ私は、以後25年、90歳前になって、先学に教えられると同時に、自説に政治と芸能を融合することを考えた。１つは沖縄島と台湾島の住人のその後

の政治・社会文化の発展過程であり、２つは中国史と日本史からの政治的照射である。

先ず指摘できる事実は、隋の使者は規模の大小は別に、数年の間に少なくとも４回も訪問している。４回目などは万の将兵であり、当然のことながら、記録係を置き、皇帝への報告を義務としている。北の高句麗戦では敗北を経験しており、南の作戦に失敗は許されない。「陳稜伝」が具に作戦を既述したのである。前項で「商旅」を特記したように、中華民族にとっては評価すべき文化であった。流求国、その後の千年史を俯瞰するならば、この島の住民は台湾諸族ではない。流求国―琉球国の住民は優れた複数構造の政治文化を所有し、自立化を果たし、近現代を迎えたのである。中近世、レキオの自立性と行動力は、その100倍の人口をようしたヤマトの列島民を凌駕したといえる。なお、台湾先住民族について付言するならば、北方アイヌ民族と同様に自然と共存し、７世紀以降、ぼぼ千年を島内で平穏に過ごしたと見られる。積極的な自然との共存であった。

文明は時として自然を無残に破壊する。近世、資本主義の勃興はヨーロッパで人間をも破壊し、傷め付ける。

イギリスを先頭に南に東に植民地を拡大する。その最終走者・日本帝国が北海道・琉球・台湾・大韓民国の順に植民地化し、中華民国を歯牙にかけて墓穴を掘った。21世紀のトランプ・アメリカはさらに劣化の度を加重した。

中国史からの科学的な流球・琉球国史照射は可能だが、日本史からの照射は古代史と現代史から困難である。時代区分で古代・現代の両日本史が未だ内外多数の賛同を得ているとは言えないからある。特に古代史をめぐっては学界の『記紀』中心主義が大きな障害になっている。例えば、記念碑的なシンポジウム・1979年の松本清張司会・井上光貞ほか参加の「古代国家の成立」（２日間）は日本史以外の中国史・美術史・考古学の泰斗をふくめた先進的・創造的な展開だった。古代国家の成立は６世紀初めに繰り下がるという総括だったが、この総括を21世紀の今なお発展させることができていないのだ。

学界･出版界は『記紀』の根源的批判という困難な登攀を要求されているといえるだろう。さらに、７世紀初めの『紀』の飛鳥政権と新羅政権の王統と「大師」の流れを比較するとこうなる。

推古女王―厩戸摂政（太子＝大師化）―○―皇極女王―○―斉明女王（重祚）―真平王―善徳女王―（元暁大師）―真徳女王―武烈王―神文王―○―○―聖徳王（在位702～736）―

倭・飛鳥政権の証明は『隋書』『旧唐書』で不可能だが、新羅王統は可能である。私見は聖徳太子のモデルは捨身供養で知られる梁武帝と新羅で「和諍国師」といわれた元暁（617～686）である。８世紀の『紀』編集者はあえて新羅王統と大師を先取り・盗用したと考えられる。大唐の序列で藤原不比等は新羅憎しで暴走したといえる。しかも『紀』は内外で久しく公開されることがなかったのだ。21世紀、日本史の学知は未だ市民をも満足させず、あえて怠慢を疑わせるとしたい。その意味で、流求･琉球史ははるかに合理的で完成度が高い。

本稿は愚生90歳に当たり基地問題と古代史学への抗議である。

注

1）倭国の前に掲載
2）福建省北部
3）歓斯、不明　按司説
4）渇刺兜、不明　頭説
5）普通名詞　頭説　可老年説あり
6）けしあざみ　普通名詞
7）由来不明
8）帥は軍の長
9）小さな郡の単位か
10）烏了帥と記載も
11）玉のおびもの
12）こざかしい
13）トルコ種族の遊牧民
14）琉球音階、独特の五音階
15）現代の琉球舞踊につながる
16）長江左岸
17）五嶺の南、華南
18）大業二年の版もある
19）航海術に熟練した人
20）第二代皇帝　618年隋滅亡時に殺される
21）羽に助けるの意
22）608年の倭国使
23）後の屋久島人か　『新唐書』に邪古
24）賁に勇ましいの意
25）唐代に朝散大夫の上
26）現在の広東省潮州という
27）台湾基隆の北、彭佳嶼説
28）久米島説（龜鼈嶼）
29）マレー人種
30）『三国志』通称・倭人伝に「宮室」記載
31）倭国条の末尾参照
32）商旅　行商は台湾先住民ではない性格

33）王、小王（洞の統率）の存在、先島ではない

34）北へ進み　南北に長い島

35）原文　「従辰至未」

36）男女数千人　当時の島の人口は数万か

＜参考文献＞

北京大学編著『中華文明史』全四冊　2006年

　邦訳『中国の文明』全８冊・早大院訳・潮出版社　2016年

松本雅明『流求国』訳『古代アジアと九州』九州文化論集・福岡ユネスコ協会　1973年・平凡社

山里純一『琉球大学法文学部紀要』36　歴史地理学　1993-3

　　「『隋書』流求国伝について～研究史・学説の整理を中心に」

郭沫若監修『中国史稿地図集』上　地図出版社（上海）1980年

呉主僅編『大学世界歴史地図』人民出版社　1988年

徐逸樵『先史時代的日本』三聯書店（北京）1991年

陳国強『台湾高山族研究』三聯書店上海分店出版　1988年

姚同発『台湾歴史文化淵源』九州出版社（中国）2000年　（壱岐『古代の風』2007年５月紹介）[注*)]

シンポジウム松本清張司会・井上光貞ほか『国家成立の謎』平凡社1980年

外間守善『沖縄の歴史と文化』中公新書　1986年

新里恵二ほか『沖縄の歴史』山川出版社　1993年

宮城栄昌・高宮慶衛『沖縄歴史地図』柏書房　1983年

木村政昭『太平洋に沈んだ大陸』第三文明社　1997年

シンポジウム谷川健一ほか『沖縄の古代文化』小学館　1983年

グスタフ・シュレーゲル　馮承鈞訳『中国史乗中未詳諸国考証』上海商務印書館　1928年　国会図書館蔵・コピー沖大図書館蔵

＊

東洋音楽学会『南洋・台湾・沖縄の音楽』音楽之友社　1968年

『日本音楽と芸能の歴史』Ⅵ「南方島嶼世界の音楽について２、呂炳川『高砂族』の音楽について」日本放送出版協会

日本ビクター制作『地球の音楽』54～56　1990年[注**)]

注*）姚同発教授は天津社会学院台湾研究所長、『東北亞学刊』編集委員

注**）1990年代末、本研究所会報に「先住民音楽の浮揚」として小文を寄稿した。1995年、ドイツの現代音楽エニグマが台湾アミ族・郭英男の歌を無断使用して批判されたが曲は大ヒットしていた。

＊

○小著　『中国正史の古代日本記録』葦書房　1984年）

『徐福集団渡来と古代日本』三一書房　1996年

王金林監修中国語訳『徐福東渡与古代日本』天津人民出版社　1997年

『扶桑国は関西にあった』葦書房　1995年

『映像文化論・沖縄発』東洋企画　2000年

『ゼロからの古代史事典』藤田・伊ケ崎・いき編著　ミネルヴァ書房　2012年（14人執筆）

○論文　「日中古代関係史における扶桑国～正史『梁書』の倭方面５国位置考」

東海大学福岡短大紀要28号　1994年

「『日本書紀』のメディア定着批判」―６世紀の中国記録「扶桑国をめぐって―

沖縄大学人文学部紀要１号　2000年

「对日本古代史的重新認識――関于正史《日本書紀》的再審視」

天津社院『東北亞学刊』2015年３期

○放送・映像作品

テレビ

『マブニの石』演出・毛利恒之作　フジ系＋沖縄テレビ　露口茂・八潮夕子主演　1963年５月

『阿蘇物語』テレビ朝日系ドキュメンタリー制作　1996年３月　ナビ田中邦衛

『志賀島』NHK・BS　1993年10月　33分独演・九州地上波ほかケーブルテレビ

ラジオ

『井上靖・孔子』1990～91年　北京放送15分50回朗読　滋賀県立彦根盲唖学校テープ所蔵

『秋の古代史教室』出演40分３回　＋王小燕アナ　2013年　中国国際放送サイト公開

ＤＶＤ

『中華文明３波渡来説』私家版42分　2016年

ほか、ラジオ・テレビ民謡番組・九州取材―放送　1957年～63年